

大学教育における PBL (Problem-Based Learning) 型 地域学習の意義についての一考察

A Study on the Significance of Problem-Based Learning Type
Community Learning in University Education

梅澤佳子*
Yoshiko UMEZAWA

キーワード：問題解決型学習、生涯学習、次世代の育成
Keywords：Problem-Based Learning, Lifelong Learning,
Fostering the Next Generation

1. はじめに

筆者は多摩大学経営情報学部で担当するホームゼミナール（以下、ゼミと略す）において16年間、PBL (Problem-Based Learning) 型地域学習を導入し実践している。前任校の湘南国際女子短期大学での実践活動を含めると30年近くになる。本研究ノートは、ゼミの活動にPBL (Problem-Based Learning) 型地域学習を導入する意義、PBL 型地域学習機会を提供することで学生にどのような学びが期待できるのかについてこれまでの実践活動をもとに考察するものである。

2. 経緯

筆者は社会学、特にレジャー社会学、地域社会学、学習社会学を専門としている。学生・大学院生時代は研究室の社会調査でフィールドワークに出かけることが多く、農家や公民館に泊まり込み、農作業の手伝いをしながら1年間にわたる農作業のサイクル、その中で人々が守り続ける祭事と伝承文化を身をもって体験しながら聞き取り調査を行ってきた。社会調査実習、指導教員や先輩などの社会調査を通じて活動するまで、社会とのつながりは限定されたもので、生活世界も人間関係も極めて狭いものであった。そのようなことから、大学の講義や書物で学ぶことと実社会を繋げて考えをめぐらすことは難しく感じていた。おそらく現在の学部生たちも同様であろうと考える。このような私自身の実体験から、学生たちには現場で活動するからこそ得ることができる深い気づきや学び、五感で学ぶ経験をさせたいと考え教育にあたっている。

また、近年、学生と話しをする中で「私は人見知りなので…」、「人づきあいが苦手です」と言っ

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

てくる学生が多い。ゼミ選択のための面談において学生にゼミの志望理由を尋ねると「地域活動を通じてコミュニケーション能力をつけたい。」「人と話すのが苦手であるが、このゼミは多世代の多様な人々と接して活動しなければならないと聞いた。私の欠点である人見知りを克服できる、ゼミで成長できると思う。」という言葉が返ってくるが多くなった。¹ 今日の学生たちが悩んでいることを聞き、自分に自信が持てず人間関係に自信がない姿を見て、まずは学生たちの生活世界への興味・関心を広げることだと考えた。そして地域や生活への理解を深め、人々の生きる姿から何かを感じる、そのためには自分の日常生活とは異なる生活の現場に出て、人々の声を聴き、思いを寄せて行動することが重要である。大学教育におけるサービス・ラーニングやアクティブ・ラーニングの必要性が論じられるようになって10数年が経過した。私は地域社会と人々の生活、地域を運営する組織や関係者について理解して、初めて真の課題を発見し解決方法を見出していけると確信しており、学生たちには地域住民、地域の支え手としっかりと関わる学びの機会を与えたいと考え教育活動を行っている。

3. 「社会力」を育てる実践活動

大学教員の職務に就いた1990年代は、まだPBL型地域学習やサービス・ラーニング、アクティブ・ラーニングという用語は用いられていなかった。PBL型地域学習やサービス・ラーニング、アクティブ・ラーニングという言葉はなく²、近い意味の言葉としては「社会調査実習」や「フィールドワーク」が当てはまるのだろうが、それは私が考える地域活動の価値とは異なるものであった。そのような時に、大学院時代にご教授いただいた教育社会学者門脇厚司先生の著書「社会力」シリーズを読みながら、学生の置かれている現状とその背景にある問題を理解し、ゼミのPBL型地域学習の意義に確信を持てるようになった。

「社会力」とは門脇の造語である。門脇は「社会力」を「自らの意思で社会を作っていく意欲とその社会を維持し発展させていくために必要な資質や能力」と定義づけた。門脇は1980年代に「最近の子どもたちは変わった」という大人たちの言葉の背景に何があるのかをその当時の様々な記録³から探り、子どもたちの変化を「他者と現実の喪失」と言い表している。門脇は1999年当時の子どもや若者にみられる変化は「他人への関心と愛着と信頼感を失くしていることであり、自分がふだん生活している世界がどんなところであるかを自分の体で実感できなくなっているのではないか。—中略—自分が住む生活世界について具体的なイメージを描けないということは、社会を作り維持していくために必要な何かを失くしていることではないか、」⁴と考えた。社会的動物であるとはどういう資質や能力があることを指しているのか、そうした資質能力を人間はどのようにして身につけるのか、先天的なものか、後天的なものか等々の問いを立て、発達心理学、脳生理学、動物行動学の研究を手掛かりに推論を重ねていった。このような研究を経て、社会的動物ないし社会的存在たるに相応しい人間の資質能力を「社会力」という造語を用いて定義づけた。門脇は、心理学の専門用語である社会性が既にある社会

¹ 多摩大学経営情報学部は、2年から3年間のゼミ履修が必修である。

² 文部科学省中央教育審議会が「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(答申)を取りまとめた2012年頃から、大学教育の変革課題としてアクティブ・ラーニングが取り上げられるようになった。

³ 金属バット両親惨殺事件など。

⁴ 門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書、iii - iv頁より引用。

に個人が「適応する」ことであるのに対して、社会力は適応ではなく自らの意思で社会を作っていく意欲とその社会を維持し発展させていくために必要な資質や能力であると説明している。そして社会力は社会を形成するための能力であるが、このような能力が失われた背景には子どもの生育環境の変化 - 家庭環境・家族機能の変化、地域機能の変化、共同性を失くした学校生活 - が影響しているとまとめている。更に、この変化は戦後の高度経済成長期に急速に広がった核家族世帯で育った親世代から始まっており、新たな互惠的協働社会の実現に向けて、子どもも親も社会力を育てる必要性を説いている。

その後の2010年1月、年の初めにNHKドキュメント番組「無縁社会～“無縁死”3万2千人の衝撃」が放送された。この番組は日本社会に大きな衝撃を与え、その後、取材を行ったプロジェクトチームによる書籍化がなれた。翌年に橋木が『無縁社会の正体』を上梓し、なぜ日本人が無縁社会を選択するようになったかデータをもとに多角的に議論している。

3. 大学の危機感他大学の取り組みをヒントに

家族、地域、働き方の変容、ICT技術の進歩によるコミュニケーションの変化（人と人との非接触化）は、門脇が述べている「他人への関心と愛着と信頼感を失くし、自らの意思で社会を作っていく意欲とその社会を維持し発展させていくために必要な資質や能力」を更に後退させる方向に向かわせているのではないだろうか。

若者を取り囲むこのような危機的状況に対処するように、現在、様々な大学でカリキュラム内やカリキュラム外の課外活動としてPBL型地域学習やサービス・ラーニングを展開している。立教大学サービスラーニングセンターの設置と「立教サービス・ラーニング」の科目開設、法政大学社会学部での「社会を変えるための実践論」の講座開設、また早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターの教員たちによる「自分たちの体験を言語化する教育実践」などは書籍化されている。法政大学社会学部の取り組みはヒアリング調査を進めているが、今後、他大学の取り組みについて現地視察に取り組みたいと考えている。

4. まとめ

戦後の日本において、青年期から成人期への移行、社会人になるプロセスは、家庭から学校そして企業への就職を理想モデルとし、社会人になるということは職に就き自立することを意味してきた。教育は市民意識や生活者として豊かに生きること、生活を楽しむ素養を身に着けることよりも優秀な労働者を育成することに力点をおいてきたと言っても過言ではなかろう。経済成長を優先する道筋を辿るうちに、私たちが生きる基盤である生活や地域は衰退の一途を辿り、人間関係や信頼関係は希薄になり、機能不全に陥ろうとしている。生活や地域は次世代の働き手を育てる場所、大人たちにとって労働再生産のための休息・休養の場所ではない。どのような生活環境が望ましいのか、学生ひとり一人がPBL型地域学習を通じて考え続ける事が重要である。

リニア型学校教育を終え受験勉強から解放された学生生活。社会人としてのスタートを切るまでの4年間、学校教育から社会教育、生涯学習への移行期間となる4年の間に、地域に参画し地域の人々と課題を共有し、課題解決に向かって協働していくことは、次世代の担い手であ

る若者たちが生活者として望ましい社会をつくり豊かな人生を切り拓いていくための重要な体験であると考え。まず生活者が、そしてその背景に社会が世界が広がっている。社会力＝自らの意思で社会を作っていく意欲とその社会を維持し発展させていくために必要な資質や能力を身につけ、生活者としての学びの継続につながっていくような PBL 型地域学習の仕組みづくりとその意義を引き続き検討していく。

引用・参考文献

- [1] 門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書. 1999 年
- [2] 門脇厚司・佐高信『大人の条件 - 「社会力」を問う』岩波書店 2001 年
- [3] 門脇厚司『親と子の社会力 - 非社会化時代の子育てと教育』朝日新聞社. 2003 年
- [4] 門脇厚司『社会力の時代へ - 互恵的協働社会の再現に向けて』富山房インターナショナル. 2018 年
- [5] NHK「無縁社会プロジェクト」取材班編集『無縁社会』文芸春秋. 2010 年
- [6] 橘木俊詔『無縁社会の正体 地縁・血縁・社縁はいかに崩壊したか』PHP 研究所. 2011 年
- [7] バーナード・クリック、関口正司監訳『シティズンシップ教育論 政治哲学と市民』法政大学出版局. 2011 年
- [8] 逸見敏郎・原田晃樹・藤枝聡編著、立教大学 RSL センター編集『リベラルアーツとしてのサービス・ラーニング シティズンシップを耕す教育』北樹出版. 2017 年
- [9] 田中優子・法政大学社会学部「社会を変えるための実践論」講座『そろそろ「社会運動」の話をしよう』明石書店. 2019 年
- [10] 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編『体験の言語化』成文堂. 2016 年